

こどもに多い不慮の事故

―主としてのどの異物について―

松本 幸久

わが国ではいったいどういう原因で死ぬ人が多いか、統計をお目にかけてみます。ここにかかげたものは、昭和三五年のものですが、わかい人々の死因のトップに不慮の事故があるのにびっくりなさる方もあると思います。不慮の事故の大半は交通事故でしめられていることは、御想像がつくと思います。が、私は本稿では、交通事故以外の事故について考察を進めたいと思っています。

ちょうどこの原稿を書き始めた時に江東区(東京都内)のガスもれによる事故がラジオで報ぜられました。

一家六人焼死、負傷中毒二三人、一六棟全半焼などなど。また毎日のように新聞で報ぜられる交通事故をはじめとする不慮の事故などなど。

私は、人々が健康で長生きができることを願って、公衆衛生学を専門の道にえらひましたのに、無残にも、不慮の事故で尊い生命をなくしていかれる方々のことをきくと、いてもたってもいられない気持ちになってしまいます。

疾病を予防する場合に、自分自身で努力して疾病を予防し、健康の保持に努めるといふ立場と、他律的な健康管理のもとにそれが行なわれる立場とがありますように、不慮の事故を考えても、同様なことがいえるでしょう。

自分自身の努力だけでは如何ともし難い性質の事故の多いこと、心からやり切れなさを覚えると同時に、また一方において、自分が何らかの適切な対策をもっていれば、なんとか生命をたすけることができたかもしれない場合もあります。

昭和三八年もまた一月中たというのに、次の朝日新聞(三八・一

死因順位（年齢階級別）（昭和35年）（昭和37年国民衛生の動向による）

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
総 数	脳 卒 中 先 天 性 弱 質 等	癌 肺 炎 ・ 気 管 支 炎	心 臓 の 疾 患 胃 腸 炎	老 衰 先 天 奇 形 疾 患	肺 管 支 炎 氣 管 支 炎 出 生 時 損 傷	不 慮 の 事 故 不 慮 の 事 故
0 才	不 慮 の 事 故	肺 炎 ・ 気 管 支 炎	胃 腸 炎	赤 痢	疹	癌
1～4 才	不 慮 の 事 故	肺 炎 ・ 気 管 支 炎	赤 痢	胃 腸 炎	癌	腎 炎
5～9 才	不 慮 の 事 故	癌	心 臓 の 疾 患	腎 炎	肺 管 支 炎	全 結 核
10～14 才	不 慮 の 事 故	自 殺	心 臓 の 疾 患	癌	全 結 核	腎 炎
15～19 才	不 慮 の 事 故	不 慮 の 事 故	全 結 核	心 臓 の 疾 患	癌	腎 炎
20～24 才	自 殺	自 殺	全 結 核	心 臓 の 疾 患	癌	妊 産 疾 患
25～29 才	不 慮 の 事 故	不 慮 の 事 故	全 結 核	自 殺	心 臓 の 疾 患	腎 炎
30～34 才	全 結 核	不 慮 の 事 故	不 慮 の 事 故	心 臓 の 疾 患	自 殺	脳 卒 中
35～39 才	全 結 核	癌 結 核	不 慮 の 事 故	心 臓 の 疾 患	自 殺	自 殺
40～44 才	癌 結 核	全 結 核	脳 卒 中	不 慮 の 事 故	心 臓 の 疾 患	自 殺
45～49 才	癌 結 核	全 結 核	全 結 核	心 臓 の 疾 患	不 慮 の 事 故	自 殺
50～54 才	癌 結 核	全 結 核	心 臓 の 疾 患	全 結 核	不 慮 の 事 故	自 殺
55～59 才	脳 卒 中	癌 結 核	心 臓 の 疾 患	全 結 核	不 慮 の 事 故	肺 管 支 炎
60～64 才	脳 卒 中	癌 結 核	心 臓 の 疾 患	全 結 核	不 慮 の 事 故	不 慮 の 事 故
65～69 才	脳 卒 中	癌 結 核	心 臓 の 疾 患	全 結 核	不 慮 の 事 故	高 血 圧 症

(以下略)

・ 一一) の朝刊の記事は、こどもをもつ同じ親の気持として全くお気の毒に思うし、一方向とかならなかったものかと残念に思うばかりです。その記事というのは「アメ玉で坊や窒息死」の見出しのもとに、「十日午後一時四五分ごろAちゃん（四つ、住所氏名略）は自宅でアメ玉をなめていて突然ノドにつまらせたのをそばにいた母親（三〇）が見つつけ、近くの医院に運び、同医院でノドのアメ玉を取りのぞいたうえ、一時間ほど人工呼吸したが、息を吹き返さず窒息死した。」〇〇署で母親から事情をきいている。」とあったのです。

なくなつたAちゃんに深くあいというの意を表するとともに、今後の例をもとに筆をとる決心をした次第です。

Aちゃんの記事がことさらに私の胸を強くうったのは、私の家でも全く同様なことが、昨年の暮におこつたからです。末の娘は当時二才七ヶ月でしたが、たまたま私が学校に出勤中で私の留守の間の出来事です。

いままでこどもにアメを与える時は、小さくくだいてやっていたのですが、その日に限って、まるごと一個与えてしまったそうです。こどもは、おとなしく母親のそばにいないで、隣の部屋にいてしまいましたので、母親は念の為に「動かないで、おすわりしてなめていきましょうね。」と声をかけながらそばへいった時、全く突然に、あめをのどにつまらせたのです。その時の娘と母親の驚きは筆

舌につくしがたしといっても過言ではありませんまい。しかしながらこの場合には誠に幸にも、すぐに救急処置を思い出すことができ、気がついた時はこどもをさかさにしてゆすっていたそうです。全く夢中だったようですが、今にして思えばよくやったというより他ありません。この処置については、上の子の幼稚園時代に母の会で「異物をのどにつまらせた時は救急処置として、さかさまにして下にゆすってみる」という話をきいたのを思い出してそれを夢中で実行していたわけです。母親の表現をかりますと、あめはボンと出て来たということですが、さもあろうと思われれます。私の家の場合は、おそらく、のどの入り口に近い所であったので運よく、さかさまにしたらでてきたのかもしれないが、母親が何もしないで、病院にこどもをだいてかけつけるだけとしたら、間に合わないで窒息死したかもしれません。帰宅して、この事件をきいた時、不慮の事故はその名の通りいつおこるかかわからないし、不慮の事故にはふだんから、何らかの適切な救急処置をだれでも心得ていなければならぬのだとつくづくわが子の例を目のあたりにして痛感した次第です。

つぎに、のどの異物について二、三解説をしてみましょう。のどに異物がつまったり、誤って気管の内に異物が入った場合は、誠に危険な事故で、放置すると呼吸不能のため死亡することがあることはAちゃんの例でもおわかりのことと思います。

昭和三五年中のこの種の事故は、人口動態統計によりますと、男一、二三五名、女六九六名、計一、九三一名となっておりますが、しかもこの事故はこどもに突発しやすいものなのです。

異物として多いのは、食品では、餅、あめで、また魚骨がささることもあるし、食品以外のものでは、義歯、小石、玩具ことにゴム製玩具、笛、貨幣があります。

この種の事故を防止するために先ず考慮すべきことは、前述したようなどの異物として危険のおそれのあるものを、年の小さいこどもが口に入れる時は、極力警戒することが必要だと思います（例えば、餅やあめをこどもに与える時は小さくしてやるなど）。また乳児の場合だと、祝賀の印象をさらに触覚でたしかめようとする習性がありますので、ちょうど手ころな大きさのものなら手当り次第に、口にもつてきて入れてしまうことが考えられます。そして、ちよつとしたはずみに、そのものがのどの異物、気管の異物という危険な事態になってしまうわけです。したがって、ふだんから乳児のまわりに、貨幣、碁石、小石、ボタンなどの類はおかないように清潔整頓に大いに留意したいものです。

さてつぎに危険な事態がおこってしまった時の救急処置を説明しようと思いますが、一つの方法だけでなく、つぎにあげるようないろいろな対策を心得ておいた方がよろしいのではないかと思います。

a、十分に口をあけさせ、歯と歯の間に指より大きい木片をはさみ（これはかまれないためと、開口保持のためにします）、人さし指または人さし指と親指をつっこんで、異物をかきだしてみます。

b、指先で舌のおくの所を下におすか、羽毛でのどをしげきすると、嘔吐運動がおこって、うまくはき出されることもあります。

c、うつぶせにねかせ、枕を胃部（みぞおち）にあてて、手のひらで背中をうつと、とれることがあります。

d、こどもをさかさにして、足をもって数回上下にゆすぶってみます。また手があれば思い切ってさかさにしたまま背中を手のひらでうつもらうとなおよいです。

aとdの方法が成功して、異物がとれて呼吸ができればしめたものです。異物がやるととれても、不幸にも息がとまっている時は直ちに人工呼吸をしなければなりません。人工呼吸法についても説明したいのですが、本稿では余裕がありませんから、またの機会にゆずります。

もし家庭での救急処置が成功しなければ、速刻もよりの医療機関にかけつけなければならぬことは申すまでもありませんが、できれば耳鼻咽喉科医の方がこの場合適切です。

なお、のどより奥の気管支内に異物が入ってしまった場合は、気管支鏡でのぞいて異物をとりだす必要があるのです。その設備のある医療機関にいかないとだめですから、一一九番で救急車の手配を考

慮すべきでしょう。

最後にのどに魚の骨がささった時の手当法について申しのべておきます。

ひとまず口をあけさせて、舌を少し強くおさえると、案外ひっかかった骨がみえることがあります。その時はピンセットなどでぬきとることが出来ます。あるいは、ご飯のかたまりや、パンの小片またはさつまいもをかまないでのみこませたり、真綿を指頭大にするめ、じゃぶな糸をつけて、水といっしょにのみこませ、糸をひいてとりだすと魚の骨が真綿についてくることもあります。または、食酢で何回もうがいをすると、魚骨が酢でやわらかくなって、食道へおちてしまうこともあります。どうしてもとれない時は、耳鼻咽喉科医をたずね、食道鏡で検査してもらい、処置をうけます。

以上思いつくままに、のどの異物による不慮の事故の発生の原因やその際の家庭でやれる救急処置について説明してきましたが、わが国のある有名な物理学者は『天災は忘れた頃やってくる』というておりますように、私たちのまわりでも不慮の事故はいつ発生するかわかりません。それこそ、こどもに対する養護のちょっとしたゆだねから『忘れた』頃やってくるかもしれません。今後十分に気をつけあって、こどもたちを不慮の事故から守ってやりたいと思えます。またそうすることが、なくなったAちゃんの冥福を祈るよすがともなるのではないでしょうか。

（お茶の水女子大学）